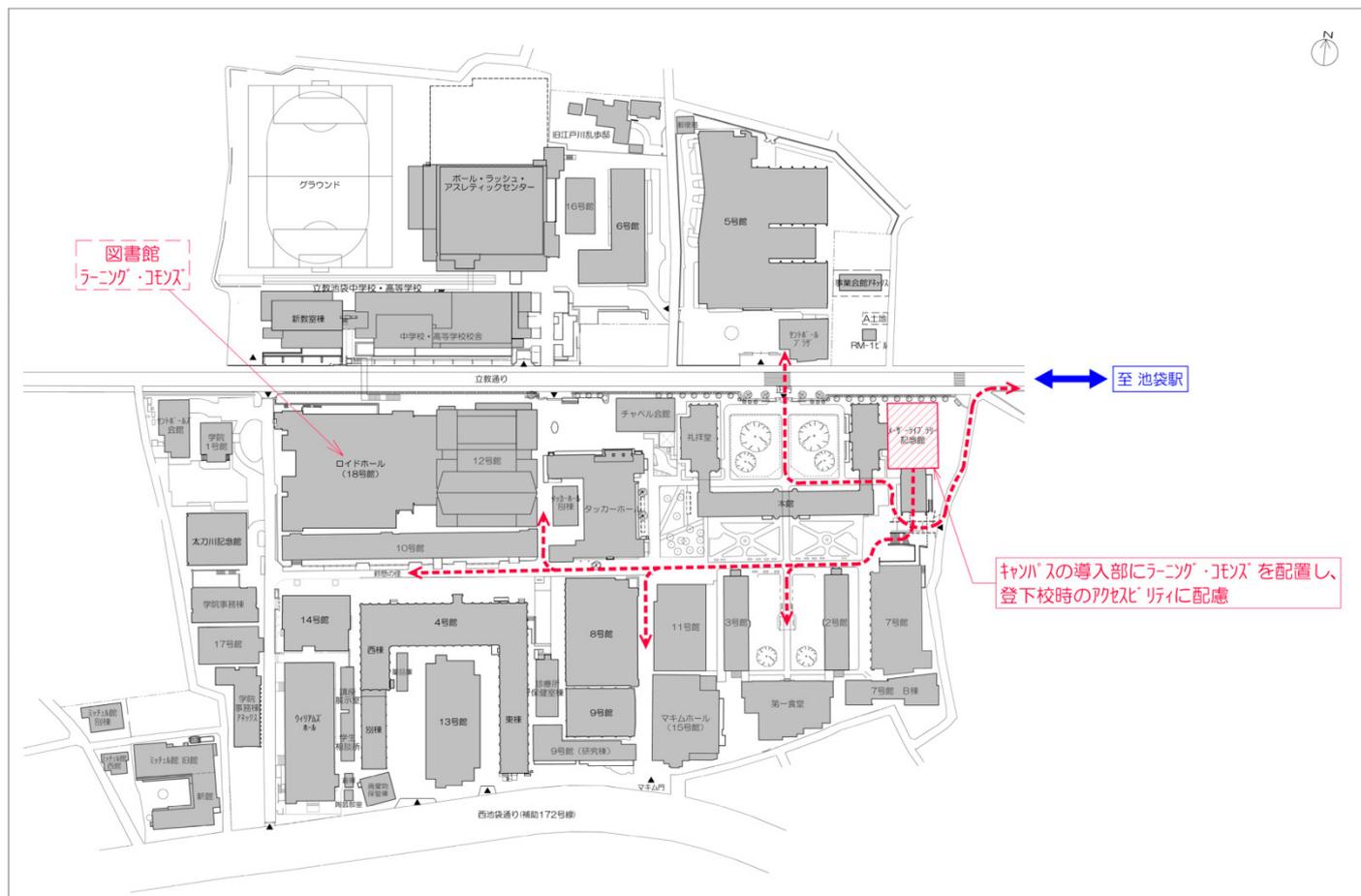


配置図



整備概要

施設名称	メーザーライブラリー記念館（新館）		
利用対象	文学部、異文化コミュニケーション学部、経済学部、経営学部、理学部、社会学部、法学部 学生数 14,628名、教員数 1,070名		
設置年度（工期）	平成26年4月利用開始（平成26年1月中旬～3月）		
整備手法	改修	構造	鉄筋コンクリート造
階数	2階、3階		
のべ床面積	908.95㎡		
整備費用	116,316千円 （設計・工事 32.6%、什器・備品 15.5%：学内整備費 ICT、コンテンツ 51.9%：国による補助金および学内整備費）		
年間の運営・管理費用	利用者サポート：14,120千円 運用管理：14,120千円（スペース運営人件費 12,453千円、ICT機器保守費 1,667千円）		
設計	立教学院総務部施設課		
施工	西松建設（株）・（株）東武百貨店		

整備内容

・整備のポイント

学生が受け身ではなく、創造的・能動的な学修、主体的な学びを行う場としてメーザ・ラーニング・commonsを整備した。

様々な形状のスペースを設け、打合せの人数や発表の形態など用途に合わせて利用できるとともに、よりよいグループワーク・プレゼンテーションを実現させるディスプレイやノートパソコン、プロジェクタなどのマルチメディア設備も整えている。個人利用者向けのカウンター席も設けており、幅広い学生のニーズにも対応している。

図書館内にすでに設置していたラーニング・commonsとは趣を異なるものとし、ゼミや授業の発表準備だけではなく、サークル等の正課外活動における発表準備、就職活動のグループディスカッション・プレゼンテーションの準備等にも利用できるようにした。また、学生証による入退場ゲートを設置せず、卒業生や他大学の学生等との交流を通じての学びができるようにした。さらには、飲食も許可し、長期滞在型の利用空間とした。

より多くの学生に、創造的・能動的な学修、主体的な学びを行う機会を作ることを目指している。

什器整備の特徴

- ・スペースの形状に合わせたデザインのテーブルと椅子の配置および各種マルチメディア機器を設置。学生が個人およびグループで正課と正課外の課題に取り組むことが可能となり、また、課題資料の作成、グループディスカッション、ゼミや授業の発表準備等、学生が主体的に学修活動を実践する環境を整備した。
- ・飲食可能なスペースとするために、椅子は防汚、撥水性能を有している。
- ・常設 PC は一部スペースのみに設置し、受付カウンターにキャンパス内で利用可能な貸出しノート PC を配備して、学生の多様な用途に対応できるようにした。また、学生持込みの PC、タブレット端末等の利用に応じられるよう無線 LAN 設備を整備している。
- ・マルチメディア機器、PC 等の配備数
大型ディスプレイ (55 型) 6 台、インフォダイナー席ディスプレイ (24 型) 6 台、インタラクティブディスプレイ (60 型) 4 台、インタラクティブプロジェクタ 2 台、デスクトップ PC10 台、貸出用ノート PC330 台、プリンタ 2 台

・運営・管理

利用者サポート、運用管理は、いずれもメディアセンターが担当。

利用者サポート

ICT 機器利用支援、メディアセンター提供サービスに関する支援

運用管理

開室から閉室までの管理、ICT 機器管理、ノート PC 貸出・返却対応、プリンタ管理、定時の滞在者数カウントと見回り、利用予約の受付と利用開始前の準備、什器整頓、掲示物管理、簡易な清掃

その他の工夫

- ・入館ゲートを設置せず、本学学生が卒業生や他大学学生等と共にグループワーク可能なスペースとした。
- ・また、本スペース 2 階で隣接するメーザライブラリー記念館 (旧館) 「立教学院展示館」を学院小学校、中学・高等学校が見学授業を行う際のワーク利用の受け入れにも応じている。
- ・本スペースが 2 フロアに分かれ、また既存建物の構造上フロア全体が見渡せないため、入口の利用状況表示 (カメラ映像) ディスプレイでスペースの空き状況を確認できるようにしている。

計画・設計プロセス

・整備の背景

2016 年度より、リベラルアーツを基軸とした教養教育と専門教育とが完全に統合された「学士課程統合カリキュラム」がスタートする。これは本学が一貫して目標としてきた「専門性に立つ教養人の育成」のために、学生の視点に立ち、全学共通カリキュラム・専門教育カリキュラム・正課外を統合した教育を実践することを目指すものである。学生に 4 年間のカリキュラム体系を「導入期」「形成期」「完成期」の 3 期に分けて提示すること、さらに、大学での課外活動も含めた学びの要素をこの 3 期のなかに組み込んでいくことが大きな特徴である。そのために、入学後のより早い段階で学生に動機づけをし、卒業後を見据えて学生生活を送ることを促すカリキュラムになっている。また、基礎を作り上げる導入期 (初年次教育) を重視し、すべての学部で「立教ファースタームプログラム」を実施することも特徴のひとつである。「立教ファースタームプログラム」では、「学びの技法」と「学びの精神」により大学 4 年間のあらゆる学修・研究に必要な基本的姿勢、基礎的能力を徹底的に鍛える。完成期には、他学部学生とのハイレベルな議論の中で、4 年間のまとめを促すことを目的とした全学共通のゼミナール科目も用意している。

1 年次春	導入期	立教ファースタームプログラム 「学びの精神」「学びの技法」
1 年次秋	形成期	
2 年次春		
2 年次秋		
3 年次春	完成期	
3 年次秋		
4 年次春		
4 年次秋		

学士課程の 4 年間の学びを、学生自らが思い描く卒業後の姿に向かって自発的に学びを組み立てていくものと捉え、これまでの「教授者がどう教えるか」という考え方から、「学習者一人ひとりがどのように学ぶのか」という考え方に切り替えること自体が大きな変革である。これらは、課題解決型授業への転換を促すとともに、授業に向けた学生の準備学修や事後学修を促すことにつながる。

上記の学士課程教育改革の一環として、学生の主体的な学びを促し、必要な学修時間を確保するための学修支援スペースを整備するに至った。

旧図書館の改修に際し、メーザライブラリー記念館新館 2 階 3 階に整備。

また、設置の検討を開始した 2013 年時点でも、グループワークの場が不足しており、学内でその拡充が求められていたことも、整備のきっかけの一つである。

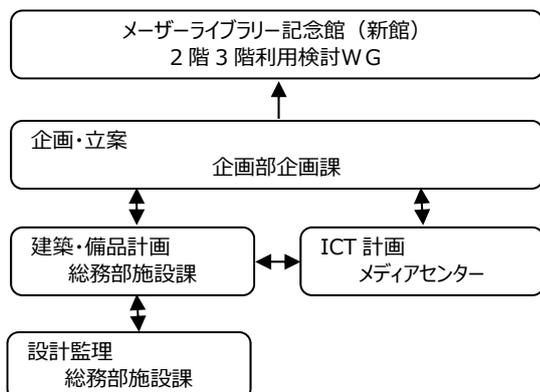
・整備の目的

学生が個人またはグループで課題に取り組み、そしてその発表に対応可能なマルチメディア設備を整備した。聞き手を意識した効果的な情報発信、企画提案など多様な学修活動を可能とした。これらの経験を通じて、学生が学修する意味を明確に理解し、肯定的な学修姿勢を身につけ、明確な目的意識のもとに能動的に知識を習得する習慣をつけることが期待される。また、知識のアウトプットによる可視化と共有が授業以外の場でも積極的に行われ、双方向型の授業の展開が一層充実したものとすること、IT リテラシーやマルチメディアリテラシーが向上することも期待される。

・計画・設計の推進体制

部長会の下に、座長を総長室長とする検討ワーキンググループ（「メーザライブラリー記念館（新館）2階3階利用検討WG」）を設置した。教務部、学生部、図書館、メディアセンターの職員をメンバーとし、企画部企画課、総務部施設課が事務局を担った。主な役割は以下の図のとおりである。

検討ワーキンググループで議論した内容を、部長会に諮り、最終決定した。



・構想から工事までのプロセス

	構想	計画・設計	工事
1年前	平成 25 年 7 月 WG 発足	平成 25 年 9 月 基本計画決定 平成 25 年 11 月 実施計画決定 平成 25 年 12 月 備品デザイン決定	
完成		平成 26 年 3 月 運用管理決定	平成 26 年 1 月 着工 平成 26 年 3 月 竣工・移転 平成 26 年 4 月 利用開始

整備後の評価と今後の展望

・利用状況

- ・授業の事前事後学修を目的としたグループワークに利用されており、4～5 名程度の少人数グループでの利用形態が多くを占めている。可動式のテーブルと椅子は、目的や人数に合わせた形に移動させて利用されている。
- ・グループワークにおいてはノート PC、常設ディスプレイ、ホワイトボード等が活用されており、これらの機材を取り囲むかたちで学生間の情報を共有し合いながら議論が活発になされている。昼の休憩時間は利用のピーク時間帯となり、昼食を取りながら PC 等を利用している利用者が大半である。
- ・長時間の滞在ではなく、1～2 時間のグループワークでの利用が一般である。
- ・入館ゲートを設けていないこともあり、学生の正課外活動および就職活動、卒業生が加わったかたちでのディスカッションも行われている。

用途（授業やイベント等）	利用者属性	頻度
正課外講座（オンデマンド）「立教ビジネス基礎講座」の受講者向けスクリーング	学部生	開講期間に 1 回
イベント（統計検定の紹介、統計検定に興味を持つ学生を対象としたガイダンス）	学部生	1 回限り
イベント（統計調査員プロジェクト希望者を対象としたガイダンス）	学部生	1 回限り

・整備の評価

- ・経営学部を中心にプロジェクト型の科目が増加しているが、本施設整備により、その授業外での学修が活発に行われるようになった。
- ・ゼミナールの事前準備も活発に行われるようになった。
- ・本施設整備前は、図書館以外には学内に創造的・能動的学修の場が不足気味であった。本施設整備により、学修の場が増加し、能動的学修を推進する利用者の裾野が広がった。
- ・利用者の制限を外し、自由度を高めたことで、ゼミナール等では卒業生による指導が活発に行われるようになった。また、ESS 等の文科系サークル団体を中心に、正課外活動においても活発に利用されており、より多くの学生に能動的学修の機会を与えることができた。

・整備後の課題

- ・20 人程度を想定した比較的大きいスペースを用意したが、少人数の利用が中心となり、効率が悪くなっている。大きいスペースを細分化可能とする方向で検討を進めている。
- ・利用者数が増加しており、座席数が足りなくなっている。レイアウト変更等により、座席数を増加する方向で検討を進めている。
- ・パソコン、ディスプレイ、ホワイトボードは非常に活発に利用されているが、大型ディスプレイ、インタラクティブディスプレイ、インタラクティブプロジェクトの利用頻度が低い。学習支援スタッフによるサポート、啓発活動を進めていく。

・今後の展望

- ・2016 年度から学士課程統合カリキュラムがスタートすることで、正課、正課外とも、能動的学修の機会が増加する。池袋キャンパスにおいては、学修スペースの不足が懸念される。既存の学修スペースであるメーザー・ラーニング・コモンズ、図書館の座席数増加とともに、別のスペースを確保する必要がある。既存の建物内に工夫して確保することが求められる。別の用途で使用している既存施設の転用も検討する必要がある。また、新たな建物の建設に際しては、同様の機能を有する学修スペースを充分確保する様考える。
- ・ハードの整備と並行して、ソフト面を整備する必要がある。学習支援スタッフの拡充、啓発活動の展開等により、IT リテラシー、マルチメディアリテラシーの向上を図る。